

万葉集

[vol.99]



天地の初の時ひさかたの天の
 河原に八百万千万神の神集ひ
 集ひ座して神分ち分ちし時に
 天照らす日女の尊天をば知ら
 しめすと葦原の瑞穂の国を天
 地の寄り合ひの極知らしめす
 神の命と天雲の八重かき別けて
 神下し座せまつりし高照らす
 日の皇子は飛鳥の浄の宮に神
 ながら太敷きまして天皇の敷
 きます国と天の原石門を開き
 神あがりあがり座しぬ
 わご王皇子の命の天の下知ら
 しめせば春花の貴からむと
 望月の満しけむと天の下四方
 の人の大船の思ひ憑みて天つ水
 仰ぎて待つにいかさまに思ほし
 めせか由縁もなき真弓の岡に
 宮柱太敷き座し御殿を高知り
 まして朝ごとに御言問はさぬ
 日月の数多くなりぬるそこゆゑ
 に皇子の宮人行方知らずも
 柿本人麻呂 卷二(一六七番歌)

訳

天地創造の初め、遙か彼方の天の河原に、八百万、一千万という大勢の神々が神々しくお集りになり、神々をそれぞれの支配すべき国々に神としてお分ちちになつた時、天照大神は、天を支配なさるといふので、その下の葦原の中つ国を天地の接する果てまで統治なさる神の命として、天雲の八重に重なる雲をかき分けて神々しくお下し申した、天高く輝く日の御子は、明日香の浄御原の宮に神として御統治なさり、やがて天上を、天皇のお治めになる永生の国として、天の石門を開いて、神としておのほりになった。

その後が大君たる皇子の尊が天下を御統治なさつたら、春花の花のように貴いことだらう、望月のごとくにみち足りておられるだらうと、天下のあちこちの人が、まるで大船のような期待を心にもつて、天の慈雨を待ち仰ぐごとくであつたのに、どういふ御配慮からか、ゆかりもない真弓の岡に宮殿の柱もりつぽにお建てになり、宮殿を高々とお作りになつて、いつの朝の奉仕にもおことばを賜わらぬ月日が多くなつたことだ。そのために、皇子の宮にお仕えた人々は、どうしたらよいか途方にくれることよ。



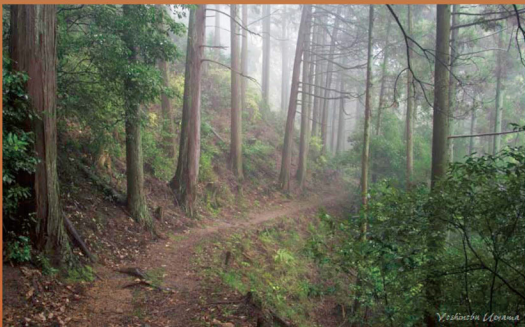
この歌は六八九年、草壁皇子の死に際して柿本人麻呂が詠んだ歌です。六八六年に天武天皇が亡くなり、皇太子であつた草壁皇子の即位が期待されながらも、二十八歳の若さで亡くなりました。

前半三十六句では、神々の時代に日女の尊が降らせた神が飛鳥浄御原の天皇(天武)であり、天武天皇がまた天に上がつていったと歌います。日女の尊とは天照大神のことで、『日本書紀』にも「大日雲尊」と名が記されています。天武天皇が天から降臨するというのは人麻呂独自の表現で、記紀神話では初代神武天皇の曾祖父にあたるニギという神が天から降臨します。

後半二十九句では、殯宮(遺体を安置する宮)におられる草壁皇子への人々の嘆きぶりをありありと叙述します。

壮大な前半部を伴うこの歌からは、壬申の乱を経て、新たな王朝の始祖としての天武天皇の位置づけがうかがえます。歌の世界でこそ成り立つ、いわば人麻呂による神話が形成されています。

(本文 万葉文化館 阪口由佳)



芋峠 (撮影者: 上山好庸さん)

所 明日香村稲淵～吉野町
 関 (一社) 飛鳥観光協会 ☎0744-54-3240

芋峠

壬申の乱が始まる約7カ月前、大海人皇子(のちの天武天皇)が吉野に隠棲した際に通つたとされる、明日香村と吉野町をつなぐ古道です。天武天皇が崩御してからも、妻の持統天皇がこの峠を越えて、都の置かれた飛鳥・藤原から吉野へ30回あまり訪れたとされています。

万葉ちゃんのつぶやき

和歌や作者などに関連するものを紹介するよ!

万葉ちゃん